



# Antelope Audio Zen Studio

高品質オーディオインターフェイスの持ち手を掴み外出可能。  
ラップトップパソコンのように携帯性のある機器が開発されました。  
ジョン・ソートンが、接続性とパワーの新基準を持つインターフェイスを楽しむ

— の新オーディオインターフェイスの箱を開けた瞬間からそのデザインの意図がはっきりとわかります。— これは通常の19インチラックに納めておくべきものではありません。その秘密は一体型の携帯用持ち手、さらに前面と背面だけでなくコンパクトで頑丈なボックスの側面にも配置されている出入力端子です。ここでのキーワードは携帯性ですが、それはクオリティーや出入力の能力を妥協した上での携帯性ではありません。

Antelope Audio(アンテロップ・オーディオ)は、おそらく数多くのコントロールルームで愛用されている、Aardvark(マスタークロックで知られるAardvarkのかつてのデザイナーであるIgor Levin(イーゴ・レビン)が創立しました。Antelopeはプロオーディオと質の高いオーディオ愛好家の市場を探求してきました。— まずLevinが高品質デジタルクロック開発経験の積み上げ、そしてAD/DA変換とインターフェイス開発を行ってきました。Zen Studioはクロッキングとコンパージョンの専門的知識を駆使した最新製品です。

もちろん、高品質という発想、どこにでも持ち運べるコンパクトなオーディオインターフェイス開発はどのメーカーも目指していますので、Zen StudioはPrism Sound、Apogee、Universal Audioと対抗し率い出るために力を尽くさなければなりません。では、それは華々しい名称以外にどんなことをしてくるのでしょうか。

合計20のアナログ入力端子のうち、12がマイク

やラインレベルで使用可能。これら12端子は全てNeutrik XLR/TRSジャックコンビタイプで、前面に4つ、背面に8つ配置されています。前面の4つの入力端子は、楽器用DIとしてアンバランス・ハイインピーダンス入力端子となり、アナログインサート(TRSジャック)が入力端子1と2で提供されています。他の8つのアナログ入力はバランスラインレベルのみで、背面のDB25コネクタで提供されています。さらに8つのバランスラインレベル出力用端子のDB25が装備されています。

モニター専用バランス出力端子は、TRSジャックで背面に装備。また2系統の個別ステレオヘッドフォン出力は前面に装備。モニターとヘッドフォン出力の全体レベルは大型のロータリーエンコーダーでコントロール可能。— クリックでメインモニター出力とヘッドフォン出力を切り替えられ、各ヘッドフォン出力の上部にあるLEDが現在使用中のヘッドフォンを明確に表示します。ステレオモニター出力専用としてだけでなく、必要に応じて前面のエンコーダーは、D-Subコネクタでの8ライン出力コントロールとしても使用可能です。— マルチチャンネルモニタリングを行いたい場合に活用できます。

デジタル接続として、2系統のADATオプティカルコネクタを機器の側面に配置し、サンプルレートに応じて8または16チャンネルのデジタルI/Oを提供します。さらに同軸デジタル端子でのI/Oを2チャンネル装備しています。またBNCコネクタでのワードクロック出入力端子搭載により全てが完璧です。電源は安全のためにロック式コネクタを使用した外部パワーサプライ。ホストコンピューターへの接続は、Antelopeが熟考した上、Thunderboltではなく、USB 2.0で提供されます。まず、高品質のOrionインターフェイスとして開発された、カスタムUSB2チップをZen Studioにも搭載したことがここでは安定性に関して最大の焦点です。さらに、コンピューターとDAWを自由に使えるデザインのため可用性が最大限に拡張します。このUSBのインターフェイスはDAW用の24チャンネルの出入力を提供し、iMac i7でのPro Tools 10|においてのインスト

ルと設定は簡単です。

前面パネルには小さいながらも、かなりの高画質ディスプレイと、ナビゲーションと選択用の3つのボタンを装備しています。すぐにお気づきになることは、これがシンプルなステータスやレベルチェック用のディスプレイとして活躍することです。ここから(サンプルレート、及び同期ソースなど)設定できるオプションもあります。ディスプレイが最も活用されるのは、ゲインの設定、シグナルレベルなどの情報提供としてでしょう。これらを変更したり、複数のデバイス機能にアクセスする場合は、付属のコントロールパネルソフトウェアを使用します。

私は時折、最近どんどん普及しているタイプの‘ミドルウェア’に苛立ちます。しかし可用性と直感性の点でAntelopeの導入に勝るものはないと言うべきでしょう。コントロールパネルウィンドウは3つのセクションに分かれています。常に表示されている最上部ではモニターとヘッドフォンボリュームのコントロール、クロックソース、サンプルレート、ディスプレイの明るさを調整できます。スタンダードなサンプルレートである32kHzから192kHzに対応し、クロックは外部ワードクロック入力、または何らかの有効なデジタル入力や興味を惹かれる名称の‘オープンシンク’と呼ばれる内部クロックが使用可能です。これは安定性の追求とも言えますが、水晶リファレンスを内部クロックに採用し64.5°Cのオープンに配備しています。USBをシンクのソースとして選択すると、サンプルレートはホストで設定可能です。このモードでZenは内部クロックを用い非同期状態になりますが、それはステータスディスプレイでは明確に表示されません。

次のセクションは有効な入力用(アナログ・デジタル)のゲインとトリムの設定が可能です。複数のタブでプリアンプステージ、ラインレベルのみの入力、SPDIF入力、ADAT入力のいずれかのディスプレイを選択できます。それらは選択するタブごとに、ゲインやトリム(-6から+12dB入力のラインレベル、適正な+10から+65dBのマイク入力、+10から+40dBの楽器用レベル入力)、さらにプリアンプケーブル入力では、ファントム電源、ライン、マイク、楽器の選択が可能です。マイクプリアンプは予想以上にパワフルで静かでしょう。— パッシブリボンマイクによる比較的静かなナレーションに使用した場合でも十分すぎるクリーンなゲインを得られました。あなたもプリアンプからのノイズに気付く前にマイクのノイズを聞くことになるでしょう。

コントロールパネルの最大部は五つのメインスクリーンのうちどれかを表示し、それはゲイン/トリムの下にあるタブで選択可能です。その一つはルーティングです。— これは全ての物理的出入力と、Zenの





内蔵ミキサーとエフェクトへの入出力を表示します。  
 - これについては後ほどさらにご説明します。ルーティングは二つのセクションに分かれています。- ‘フロム(From)’ and ‘トウ(To)’です。- 各ソースタイプにはそれぞれのカラーコードと各チャンネル番号を表示するボックスがあり、それらは必要に応じて分かりやすい名称に書き換えることが可能です。変更した名称はGUIの他のセクションにも適用されます。ルーティングはシンプルなドラッグ・ドロップで実行できます。- ソースをディスティネーションヘドドラッグするだけです。- 非常に柔軟性があり、マトリックス式の構成より簡単に、一目で現在の状況を把握できます。

類似のインターフェイス機器同様、Zenはオンボードデジタルミキシングを提供してヘッドフォンミックスなどのUSBインターフェイスで発生しがちな遅延にも対応します。カスタム製FPGAプロセスは十分な馬力があり、ミックスタブ選択時には同時に四つの32:2ミキサーを提供します。各ミキサーへの入力はルーティングページで確認でき、ミキサー出力は出力用ルーティングのために(または他のミキサーのサブミックスとして)ソースとして表示されます。ミキサーのGUIは明確で、各チャンネルとステレオマスターフェーダー用のレベルとパン、そして各フェーダーの横にシグナルメーターがあります。各チャンネルでミュートとソロが使用可能、さらに必要に応じて各チャンネルはステレオとして組み合わせ可能です。

ミキサー以外には、このFPGAアレイは(dubbed AFX)などオンボードプロセスのパワーとしても使われます。これらは16チャンネルストリップでペアを構成し、各ペアがステレオとして、またモノラルチャンネルとして活用されます。各チャンネルストリップには5バンドのイコライザーとコンプレッサーで入れ替えが可能です。イコライザーセクションはピーキングフィルター3つを可変幅Qで構成し、2バンドはハイシェルフ・ローシェルフ・フィルターとして、またはハイパス・ローパス・フィルター機能となります。コンプレッサーにはスレッシュホールド設定、ラシオ設定、時間コンスタント設定がありますが、さらに可変ニーと、ピーク、またはRMSの選択する検知機能も備えています。このようにシンプルで機能的なのですが、例えばDAWユーザーの中にはイコライザーカーブディスプレイでは、クリックでパラメータ調整できないと不満を持つ方がいるかもしれません。- しかしプロセスされる音質には重厚さがあり、全く‘デジタル’っぽさはありません。このアルゴリズム採用までに、多くの時間と努力が費やされてきたことは明白です。

ルーティングページでAFXチャンネルにアクセス

- 各16チャンネルはここではそれぞれが入力と出力となり、AFXチャンネルのチェーン化など、非常に柔軟なルーティングが可能です。例えばこれらはボーカルに微妙なコンプレッションを加えてヘッドフォンミックスの微調整として活用され、さらに必要に応じてトラッキング用のチャンネルストリップとしても十分使えるような柔軟さです。おそらくAFXをさらに有用とする機能はリバープでしょうが、これは今後のファームウェア、ソフトウェアリリース時に期待しましょう。

コントロールパネルの最後の部分は入出力(各ルーティングページのアレンジとして)の重要グループに特化しています。ライン入出力の運用レベルとモニター出力用設定ページです。(提供されている二つのオシレーターでもこれが可能で、ルーティングページの該当箇所の右クリックで出力にルーティングされます。)最後にコントロールパネル全貌のスナップショットは保存されますので、それを設定ファイルとして保存したり、GUI最上部の五つの‘クイックキー’のいずれかへアサインすることができます。

Antelopeのボックスは圧倒される野獣です。重要要素のプリアンプ、AD/DAコンバーター、USBインターフェイス、そしてオンボードミキシング/FXは、今では特別なものではありませんが、Zenはその最高峰と言えるでしょう。大規模なI/Oがこの小さなボックスで可能で、それが高品質のアナログ・デジタルハードウェア選択の鍵でしょう。コントロールパネルGUIの一部は多少の化粧直しが必要かもしれませんが(例えばミックスページのメーターが読みにくいなど)それでも‘ミドルウェア’としての直感性と柔軟性は優れたもので、あなたの作業負荷の軽減となるでしょう。このトータルパッケージは市場でポータブルなプロ仕様のインターフェイスを求める方に注目を集める価値のある製品です。

#### PROS

小型パッケージでの高出力数; 超安定型USBインターフェイス; 高品質マイクプリアンプ; 柔軟な内部ルーティング; 直感的GUI

#### CONS

コントロールパネルページで多少読みにくいメーターがある。機器前面パネルで可能な調整機能が限定されている。

#### Contact

ANTELOPE AUDIO

Web: [www.antelopeaudio.com](http://www.antelopeaudio.com)